

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第698号 平成26年3月4日

SOSを如何に見抜くか（2）

第3点は、情報共有の大切さについてです。

生徒には、亡くなる少し前に、普段の律義で真面目な態度からは考えられない、気になる行動が散見されています。調査委員会の調査では、「うつ病」に関係していたのではないかという事が見えて来たといえます。実際、周囲の人達も何かおかしいと感じていました。もしも、そうした情報について共有する機会を十分持っていれば、生徒に対する態度への見立てや対応の仕方も変わっていた筈であるとの指摘は見逃せません。

更に、自殺の防止を考えるのであれば、親と教師、教師間、教師と生徒、生徒間等あらゆる関係において、より意思疎通がし易い関係構築に努める事が大切であり、それは、学校の管理運営における普段の努力によって培われるものであるとも指摘しています。

今回の自殺事案に関していえば、報告書にも有る様に、生徒の授業における姿と部活動における姿を、どれだけ教師間で共有して、トータルに生徒を理解出来ていたのか、また、部活動指導に携わる部長、監督及び副部長が、どれだけ日常的に生徒に係わる情報を共有できていたのか、厳しく問い直す必要があるでしょう。

第4点は、専門職や専門機関との連携についてです。

本件自殺事案では、生徒は、身近な友人には自身の心境を吐露しているものの、専門的なアドバイスには繋がっていません。

生徒は、家庭の事、進路や成績の事、自殺に係わる事を、生徒の友人等に相談したり、思いを伝えたりしていた様です。そんな時に、生徒が専門的な相談窓口にアクセスしていたら、事態はもっと違ったものになった可能性があります。その意味では、専門的な相談窓口の周知にもっと力を入れるべきです。

報告書においても、学校内では、例えば、養護教諭の役割の周知、相談窓口や相談機関の紹介、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置あるいは連絡方法の周知、思春期外来をはじめとする専門機関との連携と周知等が考えられ、教育委員会は、学校だけでは対応が十分出来ない場合のバックアップが必要としています。

第5点は、メンタルヘルスの視点を持って、子ども達の心身の状態を管理する姿

勢についてです。

学校では、身だしなみ検査が徹底して行われていた様ですが、生徒が自殺直前の検査の際、普段は身だしなみが整っている生徒に異装が目についたといいます。普段問題がない生徒だという事で、特段の指導が行われなかった様です。しかし報告書でも指摘している様に、そうした機会に一步突っ込んで、本人の内面に何かが起こっているのかも知れないと考える事が出来ていれば、対応の仕方が変わった可能性は大きいと思われます。

以上、報告書の概要を紹介して来ましたが、この第三者調査委員会は18回にわたり遺族や学校関係者、教育委員会関係者等からの聞き取り調査を行った他、調査員による当時の同級生や野球部員からの聞き取り調査行う等、かなり詳細に踏み込んだ調査を行っています。

その結果纏められた今回の報告からは、学ぶべき点は多いと思います。

まずは、初動が如何に重要かという事です。問題が発生した時の初動の遅れは致命的で、それが関係者の間で不信を増幅させ、解決を遅らせる一番の要因である事は、これまでも多くの事例から分かっている筈です。

もう一つ重要な事は、生徒が自殺するという事態が生じた時、学校は直接的な原因は何かという議論をしがちです。その為に、第三者から見て自殺の原因がいじめにあるのではないか、あるいはその蓋然性が高いのではないかと考えられる様な場合でも、学校からは「いじめが自殺の原因と特定できない」という発言がしばしばなされます。

まして、今回の事案の様に、直接体罰を受けていなかったと場合に、体罰を見た事と自殺のとの因果関係について考える様な発想はなかったと思います。そういう意味では、自殺の原因を調査するという場合の調査の仕方についても、意識の改革が必要だと思えます。

勿論、保護者や教師等子どもを取り巻く大人達が、子ども達の発するSOSを見逃す事なくその総力を上げて対応し、自殺という最悪の事態を未然に防ぐ事こそ何よりも重要である事は、今更いう迄もありません。(塾頭：吉田 洋一)